エーゲ海の古代港湾・序説

高見玄一郎
（港湾経済研究所）

目　次

1. 背景——アイガイオンの海
2. デロスの古代港湾

1. 背景——アイガイオンの海（古代史におけるその位置づけ）

古典ギリシャ語で，エーゲ海のことをアイガイオンという。この言葉の語源は，さだかでない。一説によると，それは古代都市アイガイ（Aegae 現代の Limni）から来ているというし，他の説ではアマゾーン（Amazons 小アジア北辺の遊牧民で弓が上手な女軍で知られている）の女王でこの海に身を没した Aegae に由来するという。また，それは，この海に身を投げたテシウスの父アイガイウス（Aegeus）の名をとったものであるとする説もある。

いずれにしても，非常に古い時代，人間が農耕を知り，壺をつくることを覚える以前から，人々は船をあやつってこの海に乗り出し，風や，海流や，太陽や星を意識し，他の部族と交わり，多くのことを学んだであろうことは確かである。

現代のエーゲ海とは，地中海の東北部，西にギリシャ本土，東に小アジアにかこまれ，北はダーダネルス海峡を通ってマルマラ海に通じ，南はクレタ島によって，ふたをしたような多島海をさしていう。この多島海は，地質学的に見ると，古生代の地層の断片は，現在ではすべて海底に沈み，現在の島々は，小アジアの山脈に続く，重なり合い折り曲った新生代の地層で，その大部分も，すでに海底に沈んでいる。なかには，サントリーニのように，火山の爆裂火口のあとも見られる。島々の群は，2つのグループに大別される。ギリシャ本土に沿って東南の海中に散在するキクラデス群島，小アジア，現在のトルコ領土に沿って散在し，その北端はギリシャ領最大の島であるユーボオエアの北の海

上に達するスポラデス群島がそれである。

島から島へ，温暖な気候と静かな海，たえず吹いている風に送られて，古代人が航海したであろう3つのルートが考えられる。その1つは，シオス(Chios)プサラ(Psara)，スキロス(Skyros)を通って北部スポラデス(Sporades)へ，その2はサモス(Samos)，イカリア(Ikaria)，ミコノス(Mykonos)，テノス(Thenos)，アンドロス(Andros)を通ってユーボエア(Euboea)の東南の岬へ，その3はロードス(Rhodos)，カルパソス(Karpathos)，クレタ(Krete)，セリゴ(Cerigo)を通ってペロポンネソス(Peloponnesus)の南東の岬へ達した。これらの3つの海上ルートは，島々にのこる多くの遺跡の考古学的研究によってもその妥当性が示されるであろう。この主要な海上ルートの外にも，いくつかの，小さな，地方的なルートがあったにちがいない。ポール・オーファンは，その「地中海の歴史」(Paul Auphan ; Histoire de la Mediterranée, Paris, 1962)の中で次のように述べている。

「(古代の人々が)，地中海の海上を横断しようと努力した跡をたずねるとするならば，それはエーゲ海に越したものはない。そのわけは，エーゲ海が静かな海であったからではない。反対に，この海では，いろいろの風が吹きまくり，夏の晴天の折でさえも，風が白波をたて，航海を不快にするほどである。それにもかかわらず，エーゲ海（の島々）には到るところにこの時代の小さな舟を入れるにふさわしい避難場所があり，島と島との距離は，他の島かげを見つけ出すまで，1つの陸地を見失なわないほどのものであった。これが古代人の航海を容易にした大きな理由である。」

古代人の原始的な舟と原始的な航海術をもってしてもナクソスからパロスへ，パロスからシフノスへ，シフノスからミロスへ島づたいに行くことは容易であったろう。またミロスからパオレガンドロス，スキノス，イオスをたどってナクソスに達することも容易であったにちがいない。このように，島から島へと小舟をあやつって渡るという良好な条件に加えて，島であるが故に，大規模な外敵の侵略をもまぬがれたと見ることができる。このようにして，古代エーゲ海文明が，クレタ島を中心に，比較的長い期間にわたって，絢爛たる花を

咲かせることができたのであろう。

ペンシルヴェニヤ大学のジョージ E. バース教授は，ギリシャ人が海へ乗り出したのはいまから9000年くらい前であったろうと，これを次のように考証している。

「ギリシャに羊飼いや農夫が現われるはるか以前から，そこには，船乗りが存在していた。人間が狩猟や食料をさがしまわることによって生きていた，いまから9000年以上も以前に，これらの航海者たちは，エーゲ海の探さくにのり出していた。彼等は，メロス（ミロ）島の南にまで達し，固い火山性の石で，鋭い刃を持つ小刀やヘラの類をつくるに適した黒曜石を発見していた。西暦紀元前8000年頃に作られたとみられる，これらの，ガラスのような材質の各種の刃物類が，ペロポンネソスの Franchithi Cave から発見された，同時に大型の魚の骨も発見されているので，このことは，人々が海へ向って出て行っていたことを，さらに，追加的に，証明するものである。シクロス島の中石器時代の住民は，海を渡ることによってのみこの島に達することができたのである。それから約1000年後に，どこからやって来たか明確ではないが，新石器時代の農耕者が，クレタおよびキプロスの島々に現われた。」(George F. Bass ; A History of Seafaring Based on Underwater Archaeology, 1972, London)

エーゲ海文明とひと口に言うが，これは，地域的に，次の4つのグループに分かれるもののようである。

1) クレタ
2) シクラデス（キクラデス）諸島
3) ギリシャ本土
4) トロード

この四番目のトロードとは，“トロイの土地”というほどの意味で，小アジア北西部，およびレムノス，レスボス，シオス，サモスの島々を含む小アジアの西海岸およびマケドニアを含むもので，他の3つのものと多少異って，むしろ小アジア中南部の初期の文明の流れをくむものと見られている。

これらの，西暦紀元前2500年から1100年頃にかけての青銅器文化は，それぞれ，次のように呼ばれている。

1) Minoan culture（ミノア文化）
2) Cycladic culture（シクラディック文化）
3) Helladic culture（ヘラディック文化）
4) Troadic culture（トローディック文化）

これらのものは，それぞれ初期，中期，後期の青銅器文化に分かれ，クレタを除くギリシャ本土や島々の後期青銅器文化は，ミケナイ文化ないしミケナイ文明と呼ばれている（Mycenaean culture, Mycenaean civilization)。

特にクレタ島のミノア文化，ないしはミノア文明は，古代エーゲ海文明の中心的な地位にあって，ギリシャ文化を語るときには，先ずミノア文化にはじまり，次いでミケナイ文化に及ぶものが順序とされているようである。特に，後期青銅器文化のはじめに至って，クレタ文化の流行であるとか美術品であるとかが多くミケナイ地方から発見されているが，これはミケナイの部族(王)が，クレタを征服して多くの文物や職人を奴隷としてつれて来たか，あるいは交易の発展によってもたらされたか，何れかであろうと考えられている。このようにして，ミノアからミケナイへ，文化の流れが結びついてゆくのである。

たしかに，非常に古くから交易が行われていたことは事実である。古代クレタ文字の解読によって，“輸出”および“輸入”，“船主”あるいは“商館”という言葉が存在したが，これらの言葉の意味することは，現代のそれとくらべると，およそかけはなれた内容のものであったにちがいない。クレタのヘラクリオン博物館は，クレタの古代文明の遺品が完ぺきに集まっていることで有名であるが，ここの館長のスティリアノス・アレクシウ氏(Stylianos Alexiou)が，その著 Minoan Civilization（ミノア文明）の中で次のように述べている。

「宮殿は経済活動の核心であった。それは農業および手工業の本営であり，外国貿易とは一方においてはクレタの諸王と，他方においては，オリエントおよびエジプトの支配者たちとの間の贈物の交換であった。」
(Stylianos Alexiou; Minoan Civilization, Heraclion 英訳第2版)

このことは，オリエントおよびエジプトにおける同時代の社会経済組織とも符号するとこの著名な考古学者は，次のように述べているのである。

「初期のスーメリア社会では，寺院が基本的な経済単位をなしていた。それぞれの寺院は，僧侶だけではなく兵士，牛飼い，漁夫，手工業職人，奴隷および商人を含む経済の核であった。最後のもの（商人）は，単なる寺院の使用人で寺院の命をうけて商品をあつめ且つそれを遠方の地へ運んだ。バビロン王朝においては，最初から大幅な自由が存在したという説もあるが，この説は，ハンムラビ法典の職人に関する条項にてらしても矛盾する。エジプトにおいては，市民たちが果物，野菜，家禽，魚，土器の類，サンダルあるいは着物等，限られた値の品物を私的に変換するバザールも確かに存在していたが，外国との交易は，国王だけの領域であった。国王は余剰の物資を外国との交易にふり向け，船を提供し，貨物を守るために兵士たちを乗船せしめた。この当時の“原材料の輸入”とは，石材，木材であり，没薬（香料に用いた樹脂），オリーブ油，酒類も亦ファラオーの軍隊のキャンペーンによってもたらされた。エジプト人は，剣，斧，ネックレスをプント（ソマリーランド）の諸王に贈り，彼等は，そのお返しとして香，金，象牙，猿および豹を一種の貢納としてファラオーに贈った。」（同書）

こうして，クレタにおいて発見されたシリアの象牙，キプロスの銅塊，クノッソスで発見された“青色猿のフレスコ”等が，オリエントおよびエジプトとの交易があったことを意味するし，クノッソスの宮殿は，まさにそのような交易の中心にあったと思われる。同じような交易の形は，エーゲ海の島々，あるいはギリシャ本土との間に行われたであろう。

紀元前数千年の昔に，エジプトとクレタを結ぶ長距離の航海は，決して楽なものではなかった筈である。小さな船で，補助的に帆を使用し，追い風と奴隷の漕ぎ手によって，のろのろと海岸線をたどって航海したものと思われる。当時の船と航海術をもってしては，地中海をまっすぐに横断することは危険極まりないことであったろうし，殆んど不可能であったと考えられる。島から島

へ，あるいは大陸の海岸線に沿って航海するのが，唯一の方法であったと考えられる。このような原始的な船と航海によってではあるが，紀元前1600年頃から，クレタとエジプトとの交易は益々盛んになり，地中海沿岸のいたるところで，エーゲの産品が発見される。

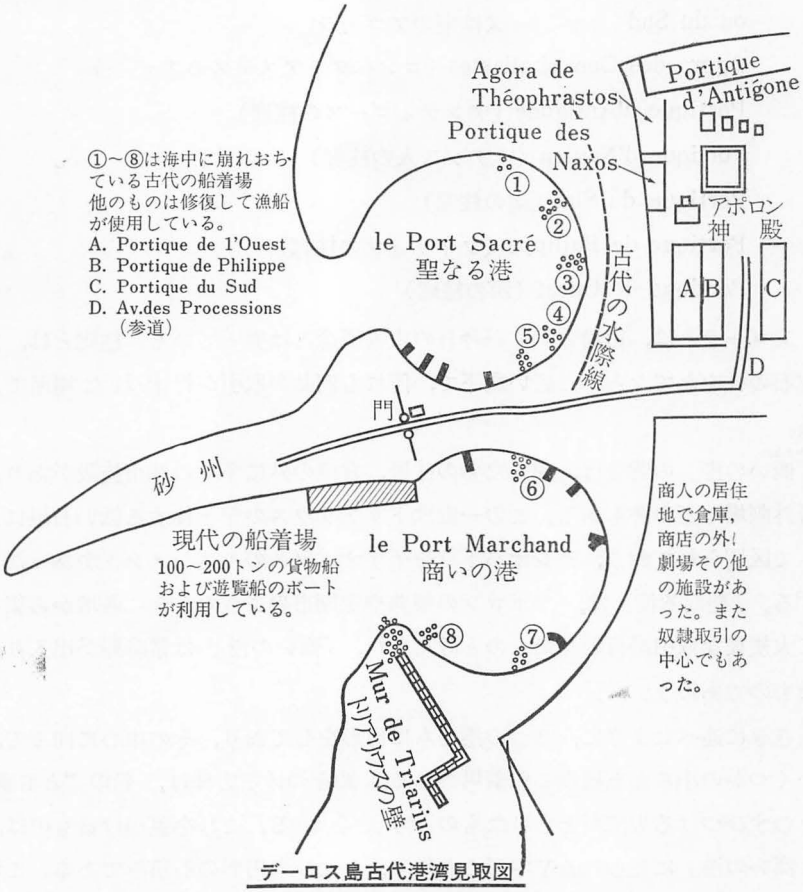
このようにして，古代エーゲ海は，ギリシャ世界の心臓部をなしていた。ギリシャ人はエーゲ海の周辺に居住し，それはプラトーが，いみじくも述べているように「池のまわりに住むカエル」のようなものであった。そして，この古代のエーゲ海世界の活動の中心点，ちょうど回転する車の軸にあたるものが伝統的にデロス島であった。それは2つの大陸に連なる小アジアおよびギリシャ本土と，クレタを通じてエジプトやオリエントに通じる，「3つの大陸の交易の場」として，注目すべき地点であった。

2. デロスの古代港湾

キクラデス（シクラデス）群島のほぼ中心，ミコノス島のすぐとなりにデロス島がある。この島に人が住みついたのは，西暦紀元前3000年頃であるとされている。前1000年ごろからイオニア人の植民がはじまり，前700年頃から，ナクソスの保護のもとに，アポロンの生まれた土地という伝説をともなって，宗教上の聖地となる。前550年頃からアテネの支配下に入り，477年にアテネとエーゲ海の島々との軍事同盟の中心となる（デロス同盟）。前314年から166年まで，独立し，エジプトの，次いでマケドニアの支配下に入る。前166年にローマがマケドニアを征服し，デロス島をアテネにかえす。ローマはエーゲ海の東南端にある交易の中心地ロードスと対抗するため，デロスにあらゆる交易上の特権を与え，前146年コリントの没落後は，エーゲ海とオリエントとの交易の中心となった。デロスの全盛時代で人口25,000を数えた。前88年にアテネの将軍Mithridateによって，徹底的に破壊され，廃墟となる。1873年にL'Ecole Française d'Athènesが発掘し今日に至っているが，古代の生活様式がそのまま豊富に残っている点において，ポンペイと共に有名である。

以上が，デロスの簡単な歴史であるが，その遺跡をたずねると，港湾発達史

の上から，極めて重要な，いくつかの特色が見られる。現在遺跡として残っているデロスの古代の港は，図に示したように，2つに分れている。



デーロス島古代港湾見取図

le Port Sacré（聖なる港）

le Port Marchand（商（あきない）の港）

現在，これらの港は埋まって，小さくなっているが，何れも直径200メートルくらいの小さなもので，円形をしている。

「聖なる港」のすぐ背後は，アポロンの神殿をかこんで

Agora de Théophrastos（テオフラストスのアゴーラ）

Agora des Italiens（イタリア人のアゴーラ）
Agora des Déliens（デリアンのアゴーラ）
ou du Sud　　又は南のアゴーラ
Agora des Compétaliastes（コンペタリアステスのアゴーラ）
Portique d'Antigone（アンティゴーヌの柱廊）
Portique d'Naxien（ナクソス人の柱廊）
Portique du Sud（南の柱廊）
Portique de Philippe（フィリップの柱廊）
Portique de Ouest（西の柱廊）

アゴーラとは，市場と訳すが今日の市場概念とは異っている。柱廊とは，大理石の柱をたてならべた広い廊下で，何れも商品の取引が行われた場所である。

「商(あきない)いの港」の背後は，商人たちの住居，倉庫の外に多くの都市施設があり，野外劇場などの跡もある。この一画はトリアリウスの壁と称する低い石垣によって区切られており，クレオパトラやディオニソスのモニュメントがあったりする。「聖なる港」は，アポロンの祭典や定期市のようなときに各地から集って大規模な取引が行われたものと考えられ，「商いの港」は常時船が出入りしたものであろう。

さきに述べたように，2つの港ともに円形をしており，その中心に向って，いくつかの小さな石積みの船着場がある。船をつける方法は，船の“とも綱”をむすびつける方法がとられたものと考えられる。これを裏づけるものは，「商いの港」に見られるY字形の石積み，および半円形の石積みである。これは，最も多くの船を一度につなぎとめることのできる形である。

人工の埠頭ができて，船舶を横づけするようになったのは，船型が大型化したローマ中期以後である（George F. Bass; A History of Seafaring, Thames and Hudson, London 1972)。ギリシャ時代の大型の船舶は，3段櫂(かい)の兵船であったが，これは海岸に大理石づくりの Shed を設けて陸に引上げて格納した。小型のものは海岸の砂浜に引上げ，あるいは“とも綱”で岸につない

だ。この方法についての記述は，ホメーロスのイーリアス，あるいはオデュッセイアーのいたるところに見ることができる。トロイの戦争におけるギリシャ船隊の海岸の船陣は有名な物語りである。

「一行がとうとう，なみなみと水を湛えた入江のうちについたとき，帆をまず下して黒塗の船の中へと収めて置き，それから帆の前にある張り綱でほばしらを下げ，受木へたぐりよせるのもたちまちにして，船を泊り場へと櫂をそろえて漕ぎすすめた。さて重りの石を（船から）投げこみ，ともづなをかたく結えてから，自分ら自身は船より海の波打ち際に降り立ってゆき……」（イーリアス上巻：呉茂一訳，岩波文庫 p. 35）

「さて広やかなアカイア人らの陣営にとうとう着くと，一同して黒塗りの船を陸へと引きずり上げた。砂浜の上に高々と，その下には長い枕木をいくつも並べ，……」（同上書，p. 37）

「またその島々には，碇泊によい入江があって，そこでは太い綱もいらず，碇石を投げこむことも，ともづなを（岸へ）結へる必要もなく，ただ浜辺へ押しあげといて，……」（オデュッセイアー：呉茂一訳，岩波文庫上巻，p. 263）

ホメーロスのイーリアスおよびオデュッセイアーは，かなり古い時代からの伝承をまとめたものといわれるが，ホメーロスの年代は前700年頃で，記述の内容も青銅器時代の末期と思われ，物語りの中に青銅は数限りなく出て来るが，鉄は極めてまれである。デロスの最盛期は，これより500年くらい年代が新しいが，この間の進歩は，簡単な，石を積み重ねただけの10メートルばかりの船着場の出現であろう。それは港に入って来る船の数が多くなり，一度にこれらのものを繋ぎとめる必要から生じたものであると考えられる。デロスの価値は，前200年頃の港の姿が，そのまま廃墟となって残っていることであるが，この港は，ギリシャの古代港湾の持つ，いくつかの特徴を持っている。

(1) 円形であること。小型の船を数多く入れるためには，円形が最も合理的である。ペルシャ戦争時代につくられたピレウス（アテネの外港）の港，リンドスの「聖パウロの港」その他エーゲ海のいたるところに円形の港が

ある。その多くが自然の地形を利用したものである。

(2) 複数の小さな港が並列もしくは極めて近くに存在すること。デロスの港がそうであるし，ピレウスも同じである。ロードスの古い港は円形のものが3つ並んでいた。カルタゴの港も2つである。デーロスの場合には宗教的行事と商取引とによって2つに港が区別されている。ピレウスやカルタゴの場合は，軍港と商港という機能的区分が見られる。

(3) 原始的な埠頭概念がすでに現われている。これは，極めてプリミティブな石の積重ねという形ではあるが，1か所に多くの船を繋ぎとめる技術を示している。